
スーパーマリオstory8 ep1

スマッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーマリオstory8 ep1

【Nコード】

N6624P

【作者名】

スマッシュ

【あらすじ】

くキノコ城

いつもと変わらない朝。

それに今日は特別な日だから。

ピーチ「ふぶつぶづん」

キノピオ「ピーチ姫何してるの？」

ピーチ「今日ねそのー・・・パーティしようかなって思って

キノピオ「そうなんですか、それは楽しみです」

ピーチ「わたしが腕によりを掛けて作るわ」

そんな楽しそうな会話を、闇からひっそりと

のぞいている。

闇がそんな二人を見つめて、こういった。

????「それはいいなあ・・・」

第一話「兆し」

第一話「兆し」

「マリオ家」

ジリリリリリ……。

朝を向かえたキノコタウンに一際大きな目覚ましの音が鳴り響く。

俺はなかなかベットから起きれ上がれずにいた。

昨日はキノコシティでかなり遊びまわった。一店、二店、三店、……。ゲーセンにいたり、ボウリングしたり。

さすがに深夜2時まではやり過ぎたな。

そんな事を考えていると、俺の目の前にそれは突然現れた。

ピーチ「もうっマリオったらいつまで寝てるのよっ！もうこんな時間じゃない」

怒ったピーチ姫の顔がうかんできた。

マリオ「んあ　っ？」

ズドドオオン！

俺はものすごい勢いでベットから転げ落ちた。全身が空中から地面へ振り下ろされた感じだった。

ルイージ「兄さんいつまで寝ぼけてんの？」

それは枉げれもなくルイージだった。

なぜかピーチ姫の顔が出てきた。なんか突然に

マリオ「ん・・・ああ・・・」

ルイージ「早くしないと・・・ボムヘイ投げるよ？」

手にはボムヘイが・・・少し表情が笑っている。

マリオ「なっ・・・やっやめんかあっ！」

俺はきつぱり目を見開き、起き上がった。

ルイージ「兄さん、今日はピーチ姫の城に遊びに行くんじゃないかなかったけ？」

マリオ「そうだったけ？・・・あれあれ」

ルイージは手に持っているボムヘイを下ろすと、俺に言った。

ルイージ「兄さん今日は大切な日だよ。

ふざけんじやないわようなんてピーチ姫に言われるよ」

マリオ「えっ嘘・・・だろ、ルイージおっお前オネエだったのかっ

（親愛なるマリオ様）

今日はとても晴れ晴れしていますね。

こんな時はあなたを呼んでパーティをしたいわ、
つてこなどで、パーティに来ちゃってね

おいしいケーキも焼いたの（スペシャルね）
早く来るとなんかプレゼントしちゃうかな

ルイージ「なんかすごいテンション高いね、なんか凄く後半からず
れてきてんだけど」

マリオ「ホッホントだ、なんかピーチ姫の書くのと異なってるな」

ルイージ「ねっねえ兄さんプレゼントダメ」

マリオ「なにっ先に行かせるわけえねえだろう」

ルイージ「だってもう僕準備済んでるし」

マリオ「おいおい俺は昨日遊びに遊んで、最高のギャンブラーを演
じるぜー。」

なんてはりきっちゃて、そのー……………疲れました」

ルイージ「じゃあボムヘイで綺麗さっぱり大爆発だね」

マリオ「ルイージ君それはちょっとおおごとになりそうだなあ……………
やめよつか？」

ルイージ「兄さんボロボロでパーティどころじゃないね」

ルイージはそう言つと、ひょこつとドアノブに手を着き。
嫌がらせをした？

ルイージ「はやくしてえよおおお兄〜さん」

ボタン

ボタン

マリオ「おいコラッ！まだ準備ができてねーぞっ！ドアの開け閉め
スナヤコラアアっ！！」

ルイージ「早くしてよおおおおおお」

マリオ「わかったわかったからあやめてー・・・」

〜クローゼット〜

俺は急いで着替えようとする。

ルイージ「で、兄さんは今日もオーバーオールでいいね」

マリオ「も ってなんだも ってっ！俺は着る服が
オーバーオールしかないって事になるじゃねえかよっ！」

ルイージ「実際そうだし・・・」

マリオ「あっ・・・確かに」

空気が重い……。

ルイージ「えっへん」

胸張ってドヤ顔してる。

俺は変な空気を変えるために、口を開いた。

マリオ「俺は今日、紳士的にスーツでも着て片手には花束なんて持ってちゃって

ようぴーち今日はお前と俺だけの時間だぜい
なんていったりするのぉおおっほほほほほっ

ルイージ「いつもオーバーオールなんでしょっスーツなんて着てたら変に怪しまれるよ」

マリオ「あ」

俺は硬直した。

ルイージ「兄さん……？じゃあ僕は先に行ってるね」

ルイージは待ちきれなくそそくさ行ってしまう。

しばらく俺は沈黙する。

いつまでも

いつまでも

く洗面所く

ルイージを追うことなく洗面所で寝ぐせを整えていた。

口に歯磨き粉をぶちまけはブラシを入れて無雑作にグシャグシャ洗う。

今朝のピーチ姫の顔がきになる。

はじめて夢に出てきた。はっきり見える。なんか・・・いやたまたまかな。

マリオ「夢って」

そんな一言が口から漏れた。

どうせ遅くてもいいやピーチ姫プレゼントしてくれるだろう・・・。
そんな事を考えながら、鏡としばしにらめっこする。
顔に勢い良く水をかける一瞬でさっぱりした。

その時っ

ボワアアアン

ッ!?

なにかが鏡に映った。

なんだろう?

マリオ「あつ、これ……」

ピーチ姫の顔だ……。なんでまた

今度は困惑している顔だった。ちらちら周囲を確認している。

ビチャアッ

奇妙な音でなにかが鏡から滲み出てくる。

HELP！ の文字が滲み浮かび上がった。

いきなり、突然浮かんだ。

マリオ「どうなってんだ？」

俺は何かが弾け飛んだような気がした。そして俺は頭、からだ全身がはつきり目を覚ました。

俺はここでなに寝ぼけてんだ……。

なにかが吹っ切れ、俺はその何かを悟る。

マリオ「ピーチ姫っ！」

これは何かの兆しか俺は外へ飛び出した。

急いで行かなければならない、理由はなにか異変があるからだ。

〜続く〜

第二話「動き」

「キノコ城の何処か」

ここはどこかわからない、視界が遮られ真っ暗だ。
そこには女性が一人いた。

ピーチ「はやく・・・助けて・・・マリオ」

ピーチ姫は暗いくらいどこかわからない城のどこかに閉じ込められたみたいだ。

ここはどこよ・・・。

暗い・・・

何も見えない・・・

暗い

暗い

暗い・・・

彼女は助けがくるまで永遠にこの闇からは抜けられない。

く二階・鏡の部屋く

次々と荷物が運ばれてくる。かわいらしい飾りやアクセサリが運び込まれていく、恐らくパーティの準備だろう。

ノコノコ「早く武器を運び込めっ！」

大画面液晶モニターや箱詰めの手榴弾、コンピューター、アイテムや火薬ダイナマイト。さつきとは打って変わって違うものだ。そして拳銃やライフルを山のように積んだ箱の武器の数々……。そこに構えていたのは。

クッパ「ふふふ・・・ワガハイも派手にやり過ぎたもんだ、ピーチ城内全てに残虐なトラップをしかけるなんてな」

小型モニターに冷ややかな目で見つめているのはあくの大王クッパだ。

画面には痛々しいとも言っても過言ではない、モニターには串刺しにされたキノピオでたくさんだった。

ハイホー「大王様これで武器は全部でございます」

ノコノコ「こちらもすべて設置しました」

クッパの下部らしいむしろ手下言うべきか全ての仕事を終えたようだった。

クッパ「さっさとマリオを蹴散らしてピーチ姫とのパーティを楽し

俺は湖のほうへ走ってゆく。

お堀を覗く。いつもは入っている水も久しぶりに抜いてある。湖とお堀をつなぐ橋のうえからまじまじと見ていた。

地下へとつながっているドアが久々に顔を出している。でもなにか気配を感じる。

しばしドアをみていると……。

何者かが顔を出した。

(ルイーヅツ?)

それにしても顔が違うヒゲはあんなに細くなく、脚もそんなに長くない。

マリオ「誰だ？」

俺は驚いて見ていると。

そいつは回りに敵がいるかないのかと言うように辺りを見渡している。チラチラと。

そいつの様子を影から見ていると、余りにもわかりやすく、俺は影で笑った。

そして俺はまた、下へ目をやる。するとっ

そいつと目が………あつたッ!

そいつは見つかりまいと急いでドアをしめる。

マリオ「なっなんだ、アイツーツ!?」

俺は急いで橋から飛び降りてドアへと突っ走るっ!

俺はドアを強引にあける。

やっぱり何かあると確信し、俺は無我夢中になってそいつの後を追った。

↓地下↓

奥へ奥へと走っていく、ここは池の水をためて置く貯水池みたいなところか。

途中で急な下り坂&上り坂がある。

下り坂で俺は足早くスピードをアップする。

今朝の鏡に映るピーチ姫の顔、いつもとちがう感じや気配を感じる。そして、さっきの不自然男……。今日起こった奇妙なことは俺の頭をかき乱して行く。

バリバリ、ガリガリとその隙間から一筋の光が見えてきた。その時、俺は思った。

もうこの城はもう敵の餌食だ……。。

俺は全力で駆け抜けていく。この城の危機が迫っているのを悟った

から。

パーンッ

いきなりの発砲に心臓が跳ね上がった。俺はわけもわからずただ驚く。

帽子の上を銃弾がすれすれに通った気がした。

そして

そいつは居た。

手にはライフルを構えている。顔は微妙に引きつっている。

俺は足が硬直した。

そいつは俺を数秒見つめ、それから静かに口を開いた。

「???」この先は我々のアジトである、これ以上の立ち入りは許さない・・・断るんならこの特性ライフルでバギューンでもいいんだぜえ?」

有無を言わず

そいつはいきなりのライフルを発砲した。

）
続
く
）

第三話「クッパの手下」

第三話「クッパの手下」

パーンッ

マリオ「うおっあつぶねええっ！」

しかしマリオは気確かにし、あっさりかわした。

その発砲音はいつの間にか、一二発連続して聞こえるようになる。連射になっていた。

マリオ「やっとうわぁ」

体勢を屈めて体を右斜めに反りながら拳を構えてそいつの方向に走った。

マリオ「ライフルを使う敵なんて始めてだぞっ！うわぁっ！」

相手の軸足を狙う

マリオ「軸足もらいいいいいいっ！！」

見事に命中した。体勢を崩しそいつは派手に転ぶ。

????「うおっ！？痛てえっくそおっ」

俺はゆっくりそいつの目の前に立ちはだかった。目は冷たく。俺は聞くことは山ほどあった。俺はまずそいつの身柄を知りたい。

マリオ「お前はクツパの仲間か？」

聞くも聞かないもそいつは顔をニヤつかせ、至近距離でまた発砲した。

マリオ「うおおっ！」

いきなりのことに俺はワントempo遅れ銃弾をかわしきれず顔の真横を銃弾が通った。

マリオ「ちいッ・・・」

俺の頬からは鮮血が滴っていた。

俺はそんなことを気にせず銃弾をかわし続けた。打ち放たれた銃弾は激しく火花を出して散ってゆく。

???「もっと踊りながらするもんだぜええっ！！へっへっへっ」

マリオ「見てろおおっ！！」

(今に見てるお前の腹に俺の最高の蹴りを食らわせてやるよ)

俺は左足を一步引き、勢いを右足に込めて放った。

マリオ「俺の懇親の一撃だあああああッ！！」

そいつに力強く華麗な回し蹴りを食らわせる。

「???」ぐわああああっ!「ごぶっ……」

かなり痛そうにみぞおちを抑えていた。
しかしそいつは銃を手放さない。

「???」はあああ……おあらああっ!「」

そいつは痛みをこらえて連射してくる。相手の銃弾をかわしながら
接近して行き、隙を狙う。

「マリオ」おいおいもう少ししっかり狙えよー。だんだん外れてるぜ
っ」

「???」ちい、口の減らない野郎だっ」

バババババツ

パンツ

バヒュン

「???」さっきのおかえしだああああっ!「」

マリオ「ゲヘツツ!」

奴は発砲をやめると構えているライフルで殴りかかってくる。

俺も奴に負けじとそいつの長くでっかちな顎に平手打ちをお見舞いする。

ゴーンツといい音を立てて、そいつはふらついた。

マリオ「へへっ・・・顎もらったぜっ」

???「俺のチャームポイントの顎をよくもぉ」

顎をなでなでしながら痛みを訴えた。

???「許さぁああああああんっ!!」

マリオ「まあまあ、そう怒んなってお前けっこついい顎してんじやん」

俺は余裕の言葉を口から出す。

???「うるせええええいっ!!」

ドドドドドッ

バシユンッ

パーンッ

ババババババッ

バギューンッ

「????」はあはあ……………くそっ!

そして相手の弾も遂には切れた。

「Mario」もうお前とはサヨナラだな、悲しいぜまた遊んでくれよな
「っ!」

俺は右の拳に力をこめ、とどめのアッパーを食らわせる。

「Mario」やつふうつふうつふうつ!」

ポーン

バギヤアッ

「????」へぶしっ?」

体が宙に舞い、がくつと崩れ落ちた。

まだ来るのかと思うと、そいつは肩を落とし降参の表情を浮かべる。
だって奴はボロボロ、そして口を開く。

「????」なかなかやるじゃねえか……………ハアハア……………でもお
前も……………そろそろ終わりだなあ」

「Mario」……………負け惜しみは聞きたくねえよ」

そいつは指を指差す俺の後方を。

「????」ほら、うしろお」

俺は気になり指差すほうを向く。

マリオ「あっ」

俺は気づいたときには遅かった。後ろには奴の仲間が二人銃を構えていた。

勢い良く凄まじい光が迫ってくる。

それはスローモーションのように。

ズバババババババツ

マリオ「ぐわああああああああああっ！！」

俺は痛みを一瞬感じた。すごく全身が避けそうだった。

.....。

.....。

.....ん。

辺りは暗くなり何も見えなくなる。

(なんださっきの光で俺.....まけたんだ.....ここはどこだよ。)

静かで何も見えない闇に包まれた。

く二階・鏡の部屋く

クツパ「おおおおおおおおお！なんと素晴らしい
いいいっ」

大王はモニターを見て大声で笑っていた。

ノコノコ「しかしまだ、また一騎残っています」

クツパ「はあ？」

く後編へ続くく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6624p/>

スーパーマリオstory8 ep1

2010年12月31日00時09分発行